Q17　休み時間における配慮

〈このような状態は自閉症の特性からきています。〉

A君の学級は、「みんな元気になかよく！」を目標にしています。毎日、中休みや昼休みになると、学級の遊び係の子どもたちが計画したドロケイや、ドッヂボールなどをして男女仲良く遊んでいます。ところが、A君は誘ってもなかなか遊びに加わろうとしません。たまに入っても、周囲の子どもたちが知らないうちに遊びから抜けてしまうことが多くあります。また、ドッヂボールでは、ボールで当てられるととても痛がり怒って出て行ってしまいます。

自閉症の子どもは、遊びやゲームのルール、作戦等を理解することが苦手なため、「勝ったり負けたりすること」「鬼になって捕まえたり捕まえられたりすること」などの、集団遊びのおもしろさを十分に楽しめないことがあります。

また、自閉症の子どもは、ある特定の強さで触ったり、身体のある部分に触れられることに対して、非常に敏感なことがあります。例えば、鬼ごっこで他の人から体や手をつかまれたりすること、ドッヂボールで体にボールが当たることも、大変痛がったり不快に感じたりします。

〈このような場合の支援　1〉

小学校１年生の知的障害を伴う自閉症の女児。休み時間になっても、学級の子どもたちの遊びに加われません。他の子どもがしている登り棒、鉄棒等の固定遊具や鬼ごっこには興味を示さず、砂場に一人でいることが多いのです。このような場合、支援の方法としては次のようなことが考えられます。

① 担任が数名の子を誘って砂場で遊び、砂遊びの楽しさを他の子にも味わわせ、その子どもの近くで同年代の子が遊ぶことで、時々でも互いに関われる機会を作る。
② 鬼ごっこのような易しい小集団遊びで、「タッチする時はそっと」「お手玉のような軽くて痛くない物でタッチする」などの、その子どもに合ったルールを決める。
③ どのような遊びも無理強いしない。

〈このような場合の支援　2〉

小学校５年生の高機能自閉症の男児。休み時間は、学級の多くの子どもたちが遊んでいるバスケットボールやドッチボールには入らず、職員室の前で通りかかる教師に話しかけたり、声をかけてもらったりして過ごしています。このような場合、支援の方法としては以下のようなことが考えられます。

④ 無理に他の子と同じ遊びをさせようとしない。
⑤ 対応可能であれば、職員や教育相談員が曜日を決めて、休み時間などに大人との自由な会話の時間を用意する。
⑥ 図書室の利用や、係・委員会の仕事等、負担にならずに楽しみながらできる仕事も検討し、具体的な休み時間の過ごし方を本人に選択させる。

学級担任の記録（メモ）

＜項目の利用回数＞

月／日	対象児の問題	教師やクラスの子どもの対応	対応後の対象児の様子